
交換ノート

忍野佐輔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

交換ノート

【Z-コード】

Z5502V

【作者名】

忍野佐輔

【あらすじ】

奈々子は交換ノートを抱えて、ある場所へと向かう。
彼女はどこへ向かっているのか……？

習作の掌編です。

所属サークルHPでも掲載しております。

電子書籍発信サークル【結晶文庫】

『では、水曜日に』

「はい。よろしくお願ひします」

奈々子は携帯電話を切り、心を落ち着かせる為に小さく深呼吸した。

田を開じる。今、自分に起こっていることを、改めて確認する。そうして再び田を開くと、ちょうど停留所にバスがやつてくる所だった。ドアが開き、幾人かの乗客が吐き出される。それと入れ替わるように、奈々子はバスへと乗り込んだ。

平日の昼間だからだろうか。奈々子が乗った車両には、乗客が一人ほどしか見当たらない。

ちょうど良かつた。少し座つてゆつくりしたかったのだ。

奈々子は真っ直ぐに一番奥の席へと向かい、窓際へ腰を下ろした。バスが動きだし、心地よい揺れを奈々子に与える。車窓からの風景は、普段奈々子が生活する都内よりどこか寂れた印象があつた。珍しいような、懐かしいような。そんな不思議な感覚に身を委ねて、奈々子は一つと車窓の外を流れる風景を眺めていた。

「ありや？ 奈々子、じゃん！」

甲高い声。

誰かと思い、奈々子が声の方向へ視線を向けると、懐かしい顔があつた。

「……麻耶」

「なーに、その顔。もしかしてあたしの事、忘れてた？」

いたずらっぽく笑いながら、麻耶は奈々子の隣へと腰を下ろす。

「おひさー、奈々子。元気してた？」

「うん、元気にしてたよ」

「あはは！　“は”つてなによ、 “は”つて！　……あ、 もしかしてアレを忘れてたとか？」

「つづん、 そんなことないよ。 ちゃんと書いてる」

「ほんとにいー？　じゃあ見せて」

そう言つなり、 麻耶は奈々子が抱えていた鞄へと手を突つ込んで、 無理矢理一冊の大学ノートを取り出した。 表紙には大きく『交換ノート、 その1-2』 の文字。

麻耶は交換ノートをパラパラとページをめくる。

「なんだ、 書いてんじやん」

「……だから書いてるって言つたじゃない」

「奈々子は口だけだからさあー」

麻耶にだけは言われたくない。 奈々子はそつ言いかけたが、 吞み込ん

だ。 十年以上の付き合いでの、 麻耶とは口喧嘩で勝てないことを奈々子は知つていた。

「うん！　これならもう、 大丈夫そうだね」

「大丈夫つて何が？」

「これだけ続けられたなら、 これから先も書き続けられるでしょ？　麻耶はそう言つて、 ノートの中身を奈々子に見せるようにしてページをパラパラとめくる。

内容は、 必ず見開き一ページで区切られていた。 左側には三行程度で書かれたお題と、 右側にはお題を受けて書かれた小説。 それがノートの最後まで延々と書き連ねられていた。

それは、 奈々子と麻耶の友情の証だった。

お題を麻耶が出し、 奈々子がそれに合つた小説を書く。 そしてそれを読んだ麻耶が、 感想と共に新しいお題を出す。 まだ一人が中学生だった頃。 小説家を志していた奈々子に『小説の修行になるから！』 と麻耶は無理矢理、 この交換ノートを始めさせたのだ。

「それじゃ！　あたしはそろそろ行くから」

麻耶は交換ノートを奈々子に返し、 席から立ち上がる。

「……？ 次のノートは？ お題は？」

「そんなのないよ」

「そんなのないって……。麻耶、それってどういう

「んじゃ、奈々子！ またねーん」

ガタン、とバスが大きく揺れ、奈々子は目を覚ました。

周囲を見回しても、誰もいない。いつの間にか、乗客は奈々子一人になっていた。

バスのアナウンスが次で終点だと告げ、ほどなくしてバスは停車した。奈々子はバスを降り、そのまま『たちばな霊園』と書かれた敷地へと入っていく。

そうして奈々子は、麻耶が眠る墓の前までやつてきた。

「最後のノートだよ」

奈々子は墓石の前にしゃがみ込み、鞄から『交換ノート、その40』と書かれた大学ノートを取り出した。

墓石の前に置いたノートを見て、麻耶が死ぬ前に言つたことを思い出す。

『いい、奈々子？ あたしはこれから死ぬけど、だからってあんたは小説を書くのをやめちゃだめ！ でも奈々子のことだから、あたしが見てなかつたらめんどくさがつて、小説書かなくなつちゃうと思うの。だから、これを渡します』

そう言つて麻耶が奈々子に渡したのは、お題だけが書かれた交換ノートだった。

麻耶は『こんだけお題考えるの大変だつたんだから、奈々子はちゃんとあたしを楽しませなさい！』と笑つて、そして、この世を去つた。

「お題考えるより、小説書く方がよっぽど大変なのよ」

奈々子は墓石に向かつて苦笑する。お題だけが書かれたノートを何十冊も渡してきた時には、何を考えているんだと思った。死ぬ間

際に何をしているんだと。

でも、そのお陰でこの二年間、麻耶がずっと側にいてくれたような感覚があった。

「麻耶。私、新人賞を受賞したんだ。水曜日に編集者さんと会うの。何ヶ月かしたら、私の本が本屋に並ぶんだって。……麻耶が、交換ノートを続けてくれたお陰、かな」

お題を書いておいてくれた、とは言わない。

きっと麻耶は本当に、ずっと私の側にいて、私の小説を読んでいたくれたはずだから。

【完】

（後書き）

サクッと楽しめるものを田描して書きました。
少し長くなってしまいましたが楽しんで頂けましたでしょうか？
もし楽しんで頂けたのなら、意見や感想などを頂けると助かります。

所属サークルHPでも掲載中

電子書籍発信サークル【結晶文庫】

<http://kessonsho-bunko.style.coocan.jp/index.html>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5502v/>

交換ノート

2011年10月9日11時16分発行